

震災からの復興活動に取り組むリーダーを、
短期・中期・長期の3つのフェーズで支援します

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート (2011.12.12 -2012.1.11)

1 右腕インタビュー



町の未来に、住民がもっと参加できる仕組みをつくる

—今どういことをされているんですか。

大船渡の仮設住宅支援事業の統括マネージャーの補佐役をやっています。統括マネージャーはいろいろ難しい判断をして決めていく必要があるのですが、その相談相手であり、時には代理として直接に課題解決に当たります。課題の共有をして、「僕が統括マネージャーだったら」って視点でソリューションを何パターンか出して、統括マネージャーから個々にフィードバックを貰って、それを繰り返しているうちに、「このソリューションで行こう」と解決策が見えてくる。そういう意味では、ある意味アイデアマンであるかもしれないし、プレスト相手かもしれないし、参謀かもしれないです。解決策を複数のメンバーで協議することの大切さを日々痛感しています。

—現地の統括マネージャーはどんな方ですか。

「みんなをマネジメント」っていう感じではなくて、本当にみんなから信頼されるアニキです。常に1人1人の想いをすごく大事にする人です。そう言ったことから、2人の役割の違いを作られていますね。自分はいろんな打開策・ソリューションを考えることが多く、現地の統括マネージャーがそれぞれの打開策におけるひとりひとりの気持ちに配慮して意見を言ってくれる。

—成田さんご自身がこれまでやられていたお仕事は、どういうお仕事でしたか。

前職はメールマガジンの配信会社で秘書を4年間務め、経営企画や採用に携わっていました。秘書という名前でしたけど、プロジェクトマネージャー的な社内業務をやっていたので、1個1個のプロジェクトをまかせてもらってローンチさせて。そこで積み重ねてきたことは今に活かされていると思います。

—どうして復興に携わろうと思ったんですか。

3月11日に震災が起きて、仙台や気仙沼や陸前高田に個別に行ったりして、問題意識はそもそも持っていたと思います。問題意識というよりは自分事化かなあ。「何ができるかな」というか。

俯瞰した言葉で言えば、東北は日本の最先端の問題がクローズアップされた場所だと思うし、世界がこれから直面していく問題を先取りして社会が浮き上がらせた地域だと思うので。問題の質としては世界の最先端だと思うんですね。そして、その問題を解決してほしいというニーズがあると考えています。

—今後の展望や課題はどう考えていらっしゃいますか。

直近の歴史を見れば、「これから町をどうするのか」を考えるのは行政というのが当たり前かもしれないですが、「自分の生活や人生は自分でガバナンスする」というのが健全な本来の在り方なのではないかと僕は思っています。自分の町の未来に、住民がもっとダイレクトに参加している。それをサポートしていくように行政も役割を変えていかなければいけないんじゃないかと思っています。

自分の中で参考事例にしているのは、アメリカにハリケーンカリーナが来てニューオーリンズが水の中に沈んだとき、「じゃあ次の新しい町をどうする」っていうことを、住民4000人以上の方々が何十回も議論を交わしながらデザインしていった「America Speaks」という事例は世界のモデルケースとなっていって考えています。僕は日本の沿岸部でニーズがあればそれを是非やりたいと思っています。そのような仕組みがあれば、それぞれの地域が独立歩行で、自分達でより良い地域にしていけるんじゃないか。

—もう震災から9ヶ月以上たっていますが、今後どういう関わり方が求められていますか。

東京や大阪など被災地ではないところでアイデアされた支援が、常に現地にマッチしているかという、必ずしもそうではない部分があります。一方で「こういう支援をしてほしい」という声を、沿岸部から発信できる人もとても限られているという現実があります。今後の課題としては、このような支援の在り方を、外部発から現地発に変えていく必要があると思っています。現地でニーズを把握して、プログラムだったり解決方法だったりのラフィメージをある程度描いて、支援をしたいという人たちに「こういう形で関わってもらえますか」と相談ができる。そういうスキームになっていくと、より現地のニーズに即した外部の関わり方ができていくのだと思っています。現実的な第一歩としては、数多くのコネクションを持っている方が短期間でもいいから現地に来てもらって、現地に精通している人と相談をする機会を増やしていくことかもしれないです。

右腕:成田好孝(32歳)

「大船渡仮設住宅支援員配置支援プロジェクト」

アカシック株式会社代表取締役。学生時代の議員インターンシップの運営・国際交流、投資会社での営業業務、IT企業にて秘書・経営企画業務など幅広い経験を生かして、右腕プロジェクトに参画。大船渡市・大槌町仮設住宅支援事業における統括マネージャーの補佐役。(写真左)

行政とNPO・民間企業が垣根を越えて連携し、事業を推進させていくモデルが各地のプロジェクトで生まれつつあり、他地域でもモデルの展開が始まっています。派遣先プロジェクトの事業がどのように進んでいるか、右腕がどのように推進に携わっているのか、現地の様子をお伝えしていきます。

■大船渡市と北上市の行政・NPO・民間企業の協働による仮設住宅支援員配置支援

岩手県北上市が国の緊急雇用創出基金の枠組みを利用した事業で、大船渡市の被災された方など約80名の雇を創出しています。北上市・NPO・受託事業者の協働チームがこの「大船渡仮設住宅支援事業」の運営を進めています。

■孤立や自治機能の低下…仮設住宅の問題解決

大船渡市内には、仮設住宅団地が37カ所に約1800戸が建設され、約4500人の入居者がいます。多くの仮設住宅は、孤立世帯や高齢者の引きこもり、自治の難しさなどの問題を抱えています。北上市では、地域団体やNPOと協働によるコミュニティ運営を行ってきました。そのようなこれまでのノウハウを活用して課題解決に貢献しようというのがこの事業です。

■プロジェクトが立ち上がるまで

経緯は、北上市の地域自治分野で活動していたNPO法人「いわてNPO-NETサポート」等の中心メンバーが震災後に「いわて連携復興センター(IFC)」を立ち上げたことに始まります。IFCは北上市と協働支援協定を結び、緊急雇用創出基金の活用について意見を交換していました。しかし、被害の大きい沿岸自治体が自身で事務を執ることは難しく、代わりに北上市が事業計画を作成し、大船渡市に対して支援を開始しました。2011年6月下旬に計画が持ち上がり、7月下旬に公募、8月上旬に採択され、雇用のための人材募集を開始、9月1日から業務を開始しています。

■支援員の活躍

事業の運営上、大船渡市内を6地区1団地の計7つに区分し、それぞれ規模に合わせて支援員約10名、地区マネージャー1名を配属。支援員は、平日朝8時半から夕方5時半まで各

地区の集会所・談話室に管理役として常駐しながら、1人につき30世帯ほどの担当世帯を訪問し、見守っています。支援員は、「仮設住宅に住んでいる人全てが健康で前向きな生活を送れる環境をつくる」ことを目指し、住民1人1人に声をかけることで、防犯・防災や、精神の安定、悩みごとの解消にアプローチしています。

■コールセンターによる情報集約の仕組み

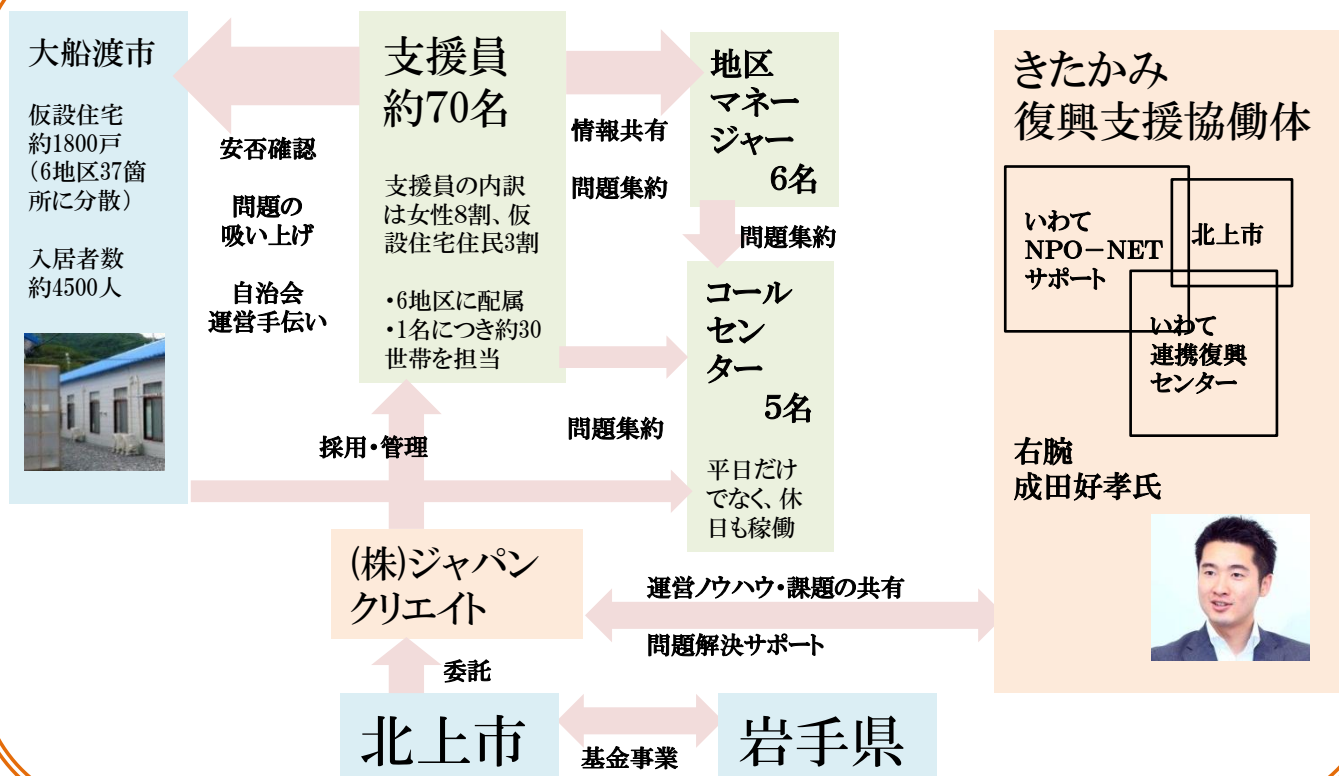
各世帯から集められた相談や困り事は、支援員が直接に解決するのではなく、解決できそうな組織・窓口への取次を行っています。そして、支援したいという外部団体との連絡窓口をコールセンターが担い、マッチングを図っています。全ての情報はコールセンターにて情報管理を行っています。併せて、コールセンターでは岩手県復興局が中心となって作成した被災者支援一覧と相談対応マニュアルを使用し、より細やかな取次業務が可能な体制を取っています。そして、対応が難しい案件については所轄行政と相談する体制(毎週)を取っています。

■右腕が仕組みづくりをサポート

表紙にインタビューを掲載した、右腕の成田好孝氏は、東京でプロジェクトマネージャーとして働いてきた経験を生かし、課題の再発防止や解決できる体制などの仕組みづくりに取り組んでいます。

■他地域への展開

過疎地や津波の被害が大きかった地域では行政機能が元通りになるまで、まだまだ時間を要しています。そのような中で、体力のある自治体がNPOや民間企業と協働し、助けを必要としている自治体に対して事業を推進しているという新しい取り組みである「大船渡仮設住宅支援事業」。同様のスキームで、2012年2月6日より大槌町にて地域支援員配置事業が開始されます。現在、岩手県内の他地域にも同様のモデルを展開していくことを進めています。



3 今月のトピックス(2011.12.12-2012.1.11)

年の瀬を迎え、流れる時の早さを感じる冬のなか、東北に生まれる可能性の一端を感じた多くの方々が集いました。都市圏のベンチャー企業の経営者、地域企業の経営者、右腕派遣者、今後も継続的に東北に関わりたいと思っている方々など、たくさんの方々が東北に対して長期に渡る関わり方を考えています。行政や他人に依存することなく、自分たちで未来を切り拓く東北の方々に直に会い、ある方は外部資源を巻き込むことで支援を続け、ある方は自身のキャリアを大きく変え人生の舵を取りました。多くのものが失われた東北では、新しく創造していくことこそが求められています。そこから生まれ出る摩擦熱が、他の地域の方々にも波及し、日本を刷新する大きな流れを生み出しつつあります。

■ 東北経営者ビジット(12月17日、18日)

■ 経営ノウハウを活かして、地域の事業戦略を共に考える

冬晴れの東北、東京から4名のベンチャー企業経営者が東北を訪れました。「震災復興において、自分たちができることは何か」を、地域の経営者の方々と共に考える場。気仙沼から南三陸、石巻、仙台と被災地とそこで主体的に生きる方々を巡るツアーを開催いたしました。

■ 「何をもって復興したと言えるのか」

上記の問いを口火に、気仙沼での事業戦略勉強会は始まりました。気仙沼と仙台からは、地域を代表する経営者の方々が5名、ETICの右腕派遣を通じて参画した右腕の3名が場を囲み、気仙沼を互いにどのような地域にしていべきか、この地域に生まれる可能性は何か、復興を前進させるための熱論を交わしました。「気仙沼はもともと、素材の供給地点だった。この震災を機に、若者が集い、産業の構造が変わるような革新的な取り組みがしたい」という地域の経営者の声に、「地域外の資源を巻き込む、地域のファンを増やすような観光を仕掛け、戦略的にメディアで発信をしていったらどうか」とのベンチャー経営者との言葉の掛け合い。そしてそれを現地に入った右腕が実現していく。智慧の協働が生み出す推進力に、期待溢れる機会が生まれました。

■ 多様性と可能性を巡る旅

気仙沼での事業戦略会議を終え、南三陸では右腕派遣先である「復興ダコの会」を回り、地域に雇用と産業を生み出そうとする熱を、石巻では有機的で新しい地域の関係性をつむぐ、コミュニティ再生を目標とした「ぐるぐる応援団」を、仙台では新進の農業を展開する法人企業を巡りました。地域で生まれる可能性から、訪れた一同が気付きを得ることが多く、東北から日本を変える、大きな兆しを感じる旅となりました。

ETICでは、今後もこのようなビジットを通じて、地域外の資源(叡智、経営資源、メディア等)を巻き込むとともに、東北で生まれ出る、起業家精神の潮流を、これからの日本を創る若手やベンチャー企業の経営者に、継続的に提供していきたいと考えております。



■ CPキャンプ(12月19日、20日)

■ 地域が交わり、相互に復興し合う可能性

全国各地の地域プロデューサーの方々が集った、CP(Community Producer)キャンプ。北は北海道から南は沖縄まで25名が宮城県に集結し、死者600名強を出し壊滅的な打撃を受けた山元町を巡るとともに、東北経済産業局を訪ねし議論を交わしました。宿泊時の夜、日本のあらゆる地域の方々が、今後どのような形で東北に関わっていくか、観光を通じた相互的な地域発展の可能性や、他の地域の人材が東北に長期間入り込んで復興を担う可能性などの議論が交わされました。「復興」、「被災地」という言葉がメディアで下火になる一方で、当事者意識を持った多くの地域の方々が協働し合い、日本全体を面として支えていく、新しい地域間発展のモデルを生み出しつつあります。

■ みちのくナイト(12月27日)

■ 『2012年、東北をどういう場にしていこう』を語ろう

師走も終わりを迎え霜がかかる渋谷の夜、およそ50名の方々が、これからの東北への関わり方と自身の生き方を考えようと、ETICオフィスに集いました。右腕として現地に入った5名の方々を迎え、地域の関係性のなかでスモールビジネスをいかに生み出していったか、コミュニティづくりをいかに促進したかと経験を語っていただくとともに、彼らが東北で見つけた知見を共有していただきました。

■ 事実を風化させないために

被災地出身の方が言いました。「現地出身の若者が集まっても、誰も震災の話をしな。それに強い危機感を覚えている」と。年明けにはいよいよ失業保険の終了がむかえ、復興の踊り場がやってきます。ひとりひとりが主体的に発想し、確かに地域を支えていく、小さくも確かな動きの積み重ねをしていこうと言葉を交わしました。



活動 エリアマップ

※ 1 番号は、右腕の参加プロジェクトです。



- 1 「東の食の会」プロジェクト
- 2 キッズドア「タダゼミ&ガチゼミ」
- 3 ふらっとーほく プロジェクト
- 4 地域創造基金みやぎ
- 5 復興支援リサーチプロジェクト
- 6 コミュニティ・ワーク創出事業プロジェクト
- 7 仮設住宅・第二のふるさと創出プロジェクト
- 8 放課後学校 コラボ・スクールプロジェクト
- 9 つなプロ気仙沼
- 10 気仙沼・情報発信力アッププロジェクト
- 11 仮設住宅で生活する子どもたちの教育支援プロジェクト
- 12 東北 Roku プロジェクト
- 13 コミュニティバス運行プロジェクト(ぐるぐる応援団)
- 14 地域の未利用資源活用とコミュニティ再生プロジェクト (つむぎや)
- 15 なつかしい未来商店街プロジェクト
- 16 地域看護・地域福祉 後方支援プロジェクト
- 17 大船渡仮設住宅支援員配置プロジェクト
- 18 復興応援団
- 19 みやぎ連携復興センター
- 20 南三陸復興アトリエプロジェクト

2012年1月11日現在、右腕へのエントリー者数は132名、そのうち63名を右腕として現地へ派遣しました(緊急支援フェーズ15名、リーダー支援フェーズ48名)。現在の派遣プロジェクト数は25。産業復興、医療・福祉、教育、コミュニティ支援、中間支援と、多岐にわたるテーマを持つプロジェクトへ、人材を派遣しています。また、2週間～1か月の期間、プロジェクトの推進にコミットする「短期プロジェクトスタッフ」は29名となりました。

5 ご支援・ご寄付のお願い

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在のご寄付の総額149,819,939円のほか、民間企業や国内外の財団から引き続き支援に関する照会をいただいております。

しかしながら、右腕人材の派遣をはじめとして、現地で復興の取り組む人々からの支援のニーズは予想以上に高く、右腕派遣の目標を「50件のプロジェクトに200名」と当初の倍に設定しなおしたのをはじめ、各プロジェクトへのハンズオン支援の充実、新たなプロジェクトのインキュベーションやスタートアップ支援など、震災復興リーダー支援プロジェクトの全体像の再構築に取り組んでいるところです。

目標の変更に伴い、総予算額も3年間で6億円以上の規模となる予定で、改めてファンドレイジング戦略の強化を実施してまいります。

皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えをはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくお願い申し上げます。

信頼資本財団「震災復興リーダー基金」

≫ <http://www.shinrai.or.jp/fukkou-shien/etic/>

連絡先・お問い合わせ先

◆NPO法人ETIC.内

震災復興リーダー支援プロジェクト 事務局
(担当:山内・辰巳)

東京都渋谷区神南1-5-7

APPLE OHMIビル4階

mail: fukkou@etic.or.jp

Web:

<http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>